

たとえば「東京」という言葉がありますが、この「キョウ」という読み方は呉音です。ところが長安では「ケイ」と読んでいます。ですから、学者は「キョウ」とは読まず「ケイ」といいました。

「正月」という言葉も、日本人は初めから「ショウガツ」と読んでいましたが、長安では「セイゲツ」と読みました。このため江戸時代まで、学者の中では、正月のことを「セイゲツ」といいました。江戸時代でも教養のある人たちは「セイゲツも近くなりましたな」というように言ったようです。しかし、それよりも何百年も前から、日本人に長年呼びなれていた「ショウガツ」という呉音が日本人の体に染みついていたから、これはなかなか抜けませんでした。

言葉とか文字とかいうものは、伝統を重んじます。呉音というものが根づいていますから、それを改めることは至難の技です。

しかし新しくつくった言葉は極力標準音で読もうとするわけです。「ガツ」とは読まないで「ゲツヨウビ」というのです。「ガツヨウビ」といってもいいのですが、「ガツ」は呉音で、要するに方言であると言われていません。

したがって新しい言葉をつくる以上は、漢字の正しい発音である漢音で読もうということになり「ゲツヨウビ」と読むようになったのです。

東京の「キョウ」というのも呉音です。しかし、東京と横浜とを合わせて「京浜(キョウヒン)」という時には、新しい言葉ですから「ケイヒン」と漢音

で読みます。千葉との間も「京葉(キョウヨウ)」ではなく、やはり「ケイヨウ」と読みます。

このように新しい言葉をつくった場合は漢音で読まれます。しかし古い言葉は呉音で読み慣れていますから、「ショウガツ」というような読み方をするわけです。

「絵」を「エ」と読むのは、もちろん「会(エ)」という字がついているから「エ」と読む、つまり呉音です。

これに対して「絵画(カイガ)」というような言葉になると、漢音読みになるわけです。

ところで「絵(エ)」というのは、たいていの人は日本語だと思っていますが、これは中国語です。中国語の「絵」に相当する言葉は、当時の日本にはなかったのです。

つまり、当時の日本はまだ文化レベルが低かったので、「絵」というものを言葉としてもっていなかったわけです。そして中国から「絵」そのものが入ってきます。「これはきれいですね。何というものですか?」「それは絵です」。こういう具合に中国人が教えるわけです。そこで初めて「絵」というものがわかるのです。

「エ」というのは訓であり、日本の言葉であって「カイ」が中国の読み方、つまり音であるというような学者や辞書がありますが、これは誤りです。「エ」も「カイ」も音です。「エ」は呉音、「カイ」は漢音です。